

研究の現状

1 新研究テーマについて

「学ぶこと」と「生きること」の統合 - かかわり合う中で、自己の学びをつむぐ -

メインテーマ「『学ぶこと』と『生きること』の統合」は前テーマを引き継ぎ、本校が目指す教育活動および研究の方向性は継続する。

サブテーマ「かかわり合う中で、自己の学びをつむぐ」は、「主体的に学び続ける集団へのアプローチ」の内容を引き継ぎ、「自己の学びを文脈としてとらえ、それを更新する学び」をより一層重視するとともに、そのために欠かせない「協同的な学び」のあり方についてさらに追究していこうという思いを込めたものである。この学びの構造のとらえ方は、本校のカリキュラム構造の中核をなしており、授業づくりのコンセプトとしても欠かせないものである。

2 研究の構想

サブテーマに直接関わる研究の柱は、以下の二つである。

ナラティブアプローチ的視点での学びの文脈づくりを促す、継続的・効果的かつ多様な教師のかかわり方（個の学びの再文脈化）
個と個をつなげ豊かな学びを築くための交流のあり方と、そこでの教師のかかわり方（協同的な学びの構築）

この二つについては、生徒同士あるいは生徒と教師とのコミュニケーションの基盤がどう築かれているかが大きなポイントとなる。

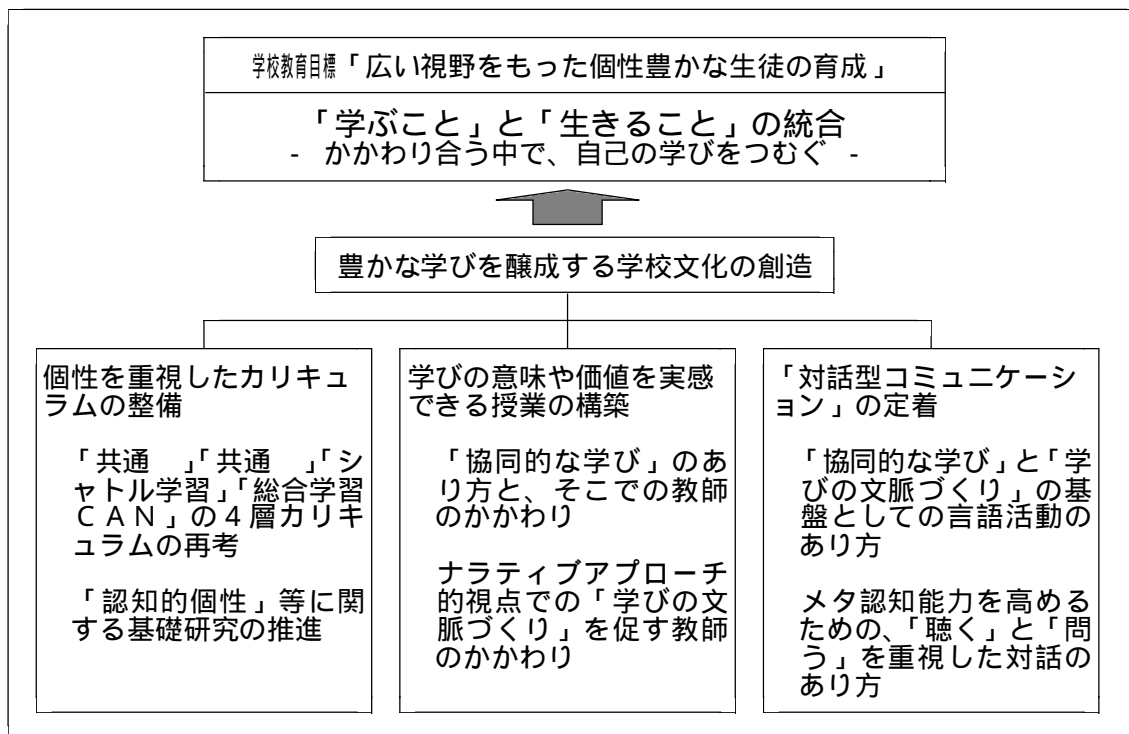
そこで、学校生活でのコミュニケーションをさらに対話的なものにし（対話型コミュニケーションの定着）、一人一人の生徒にとってより意味のある学びを実現していくための研究を深めようとしている。11月からの研究授業でも、生徒同士や教師と生徒との対話状況の分析に力を注いでいる。

また、前回も研究の柱として取り組んだ「主体的に学び続ける生徒を育成するカリキュラム」「主体的な学びを促す学習環境」についても継続して研究を続け（カリキュラムの整備・学校文化の創造）、一層の充実を図る。

特に「共通」「共通」「シャトル学習」「総合学習 CAN」の4層カリキュラムについては、24年度から教科の選択学習が必修でなくなるということを踏まえて、「シャトル学習」を「総合学習」の中に位置づけることに伴う変更が必要である。「シャトル学習」を「『共通学習』と『総合学習』をつなぐもの」という位置づけから、「自己の学習特性を活かしながら『総合学習 CAN』での学び方を身に付ける場」という位置づけへとシフトしていくことになる。

さらに、今期は一人一人の生徒に応じた学びの実現のために、生徒の認知的個性等に関する基礎研究にも力を注ぎ、理論的裏付けがあり、かつ実践的なカリキュラムの提案を目指す。具体的には、関西大学の松村暢隆先生と共同研究に取り組み、「認知的個性」（CI：Cognitive Individuality）という包括的な概念に関する研究を進め、幅広い視点から「共通学習」「シャトル学習」「総合学習 CAN」の関連性の強化に努める。

研究構想図



3 研究の内容

個性を重視したカリキュラムの整備

- (1) 「共通」「共通」「シャトル学習」「総合学習CAN」の4層カリキュラムの再考
「シャトル学習」「総合学習CAN」をともに「総合学習」とすべく、リデザインする。
「共通」「共通」「シャトル学習」「総合学習CAN」の関連のあり方を再考し、4層カリキュラムの一層の充実を図る。
- (2) 「認知的個性」等に関する基礎研究の推進
「認知的個性」(CI)に関する基礎研究を大学研究者との連携によって進め、学びの個性化を促進するカリキュラムのプロトタイプを開発する。
多様な評価のあり方とその運用について研究を進め、カリキュラムと密接に関連づける。

学びの意味や価値を実感できる授業の構築

- (1) 「協同的な学び」のあり方と、そこでの教師のかかわり
「協同的な学び」成立のための諸条件を整理し、方略的なかかわり方について追究する。
異学年合同グループでの探究活動についてのモデル(自立した学習者の探究的な学び)を開発する。(アクションラーニングの援用等)
- (2) ナラティブアプローチ的視点での学びの文脈づくりを促す教師のかかわり
ナラティブアプローチを教育実践に活かすことの意義と有効性について理論構築する。
自己対象化についての研究を進め、ナラティブアプローチ的視点から、振り返りの方法について見直しを図る。

対話型コミュニケーションの定着

- (1) 「協同的な学び」と「学びの文脈づくり」の基盤としてはたらく言語活動のあり方
生徒や教師の対話状況の分析を進め、実践に裏付けされた、本校がめざす「対話型コミュニケーション」の具体的内容を整理する。

全教育活動を視野に入れて、よりよい対話状況の実現を目指す。

(2) メタ認知能力を高める、「聴く」と「問う」を重視した対話のあり方

「聴く」ことと「問う」ことの重要性について、メタ認知的視点から明らかにし、メタ認知能力を高めるための、具体的な対話のあり方について追究する。

豊かな学びを醸成する学校文化の創造

(1) 生徒の気づきを生み出す空間づくりを推進するとともに、特別活動・道徳の時間等とのリンクを整理し、学びの場としての文化的風土の醸成に努める。

(2) 外部支援者との共同による教育活動をさらに進め、支援態勢の充実を図る。

4 現在の研究の状況

「対話型コミュニケーションの定着」に向けて

「協同的な学び」と「個の学びの再文脈化」の質が高まるためには、様々な対話が基盤としてはたかなければならないはずである。生徒同士の対話、生徒と教師との対話、自己との対話、「もの」や「こと」との対話などの質的向上を目指して、そこに焦点をあて、生徒や教師の授業における対話状況を分析するための授業研究を進めている。(11月～)



【国語科：「ペアでの対話」「4人での対話」によって課題に対する考えを深めている】

「総合学習 CAN」「シャトル学習」のリデザイン

「総合学習 CAN」は、本校カリキュラム上、最高レベルの学びの場である。自分の興味関心に応じて研究テーマを設定し、異学年の小グループで探究していく。この学びの中には、「協同的な学び」や「個の学びの再文脈化」を初めとする本校研究の要素がふんだんに盛り込まれている。21年～22年の実践においては、課題設定の段階で苦勞する生徒が多かった。研究として追究していくに値する課題がなかなか見出せないのである。

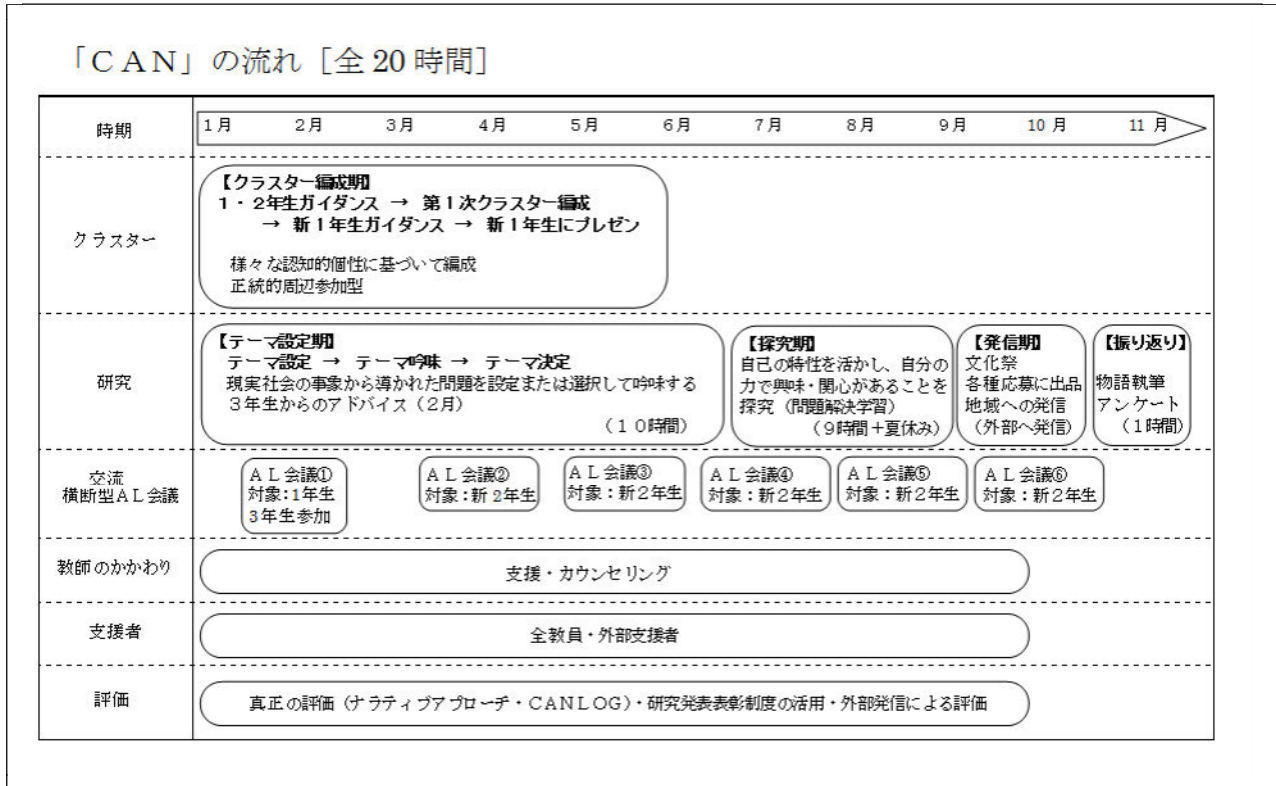
そこで、次期(23年1月より開始)「総合学習 CAN」では、課題設定および課題の吟味の段階に重点をおいて研究を進めようとしている。特に、この段階でのカウンセリングやグループ間交流(アクション・リング会議)を充実させようと考えている。

なお、「総合的な学習の時間」については、学習指導要領の改訂に伴い、時間数が削減され、併せて教科の選択学習も必修ではなくなる。本校では現在、「シャトル学習」を選択学習として位置づけているが、24年度からは「総合的な学習の時間」として位置づける見通しである。つまり、「シャトル学習」と「CAN」を一まとめとして「総合学習」とするよう段階的にシフトしていこうとしている。

「シャトル学習」については、「総合学習」へとリデザインするにあたって、「共通学習(教科学習)」と「総合学習 CAN」を「シャトル学習」でどうつなぐかを検討した。具体的には、

「探究方法を体験的に学ぶ場」「認知的個性を自覚する場」とするという構想のもと、「総合学習 CAN」と併せて具体的な実施案を検討している。

〔次期「総合学習 CAN」の構想〕



〔次期「シャトル学習」の構想〕

